
私は誰？

シロクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は誰？

【著者名】

Z8569C

【作者名】 シロクロ

【あらすじ】

短いホラー？です。この前みた夢ですがストーリーになってたのでかけてみました。暇つぶしにもなりませんが興味のある方はどうぞ

最近、おかしなことがある。

「デジャブだ。いや、その言葉が正しいのかも分からない。

ただ私は時々、なんの前触れもなく何かの言葉をきっかけにふと知らない記憶の蓋が開き、知らないはずの知識が頭を駆け抜けるのだ。ある休日、私は気まぐれに何気なくそのデパートに入った。そして服を見に行つた。売り場を適当にうろついているとふと店員と目が合い、なんとはなしに会釈する。なのに店員は私を見るなり急に顔面を蒼白にした。

「あ…あなたは…どうして?」

「はい? なんなのこの人?

訳がわからぬけど、たぶん人違いかなにかだらう。無視をして適當な服をクレジットカードで購入した。

そして喫茶店で一休みしていると自分の名前が呼びだされ、先ほどの服屋にこいとアナウンスがかかつた。
なんだろうか。訳が分からぬ。ここにきたのは初めてだし、知り合いに店をしてる人がいるとは聞かない。

とりあえず足を向けると裏手に引っ張られ事務室のようなところで数人に囲まれながら席についた。

「どういふことだ?」

「生きてたんですか?」

「改名もしたんですね?」

は？ ますます意味が分からない。

不気味だが下手な反応をして刺激するとマズイので黙つて聞いていると、店員たちはペラペラと親しげに話を続けてきた。

すると、急に頭に映像が浮かぶ

自分が風呂場にいる。しかしこんな浴室は知らない。鏡に映る顔はたしかに私のものだ。

重なるように映像が現れた。それはあまりに早く流れ、確かに走馬灯だと思った。しかしその流れる人生は、私の知らないものだ。気付くと鏡の中の私はうつすら笑っていた。

いや違う！ 私じゃない、私はあんな風に笑つたりしない。ぞつとした。あまりに強烈な印象で、私はただ恐ろしかった。

一度見たら忘れられないような、にやにやした卑屈な笑みだつた。そして鏡の中の私にそっくりな女は左手にカッターナイフを滑らした

「その、怪我はどうなんだい？」

店員の中で唯一の男の声で私はふいに現実に戻された。何がなんだか分からぬがそれでも反射的に左手をつをつけた。

「私はリストカットなんてしてない！ 私はまだ24歳だ！」

後半は特に不鮮明なところが多い映像だつたが生まれた年は私より5年早かつた。それに名前も私とは違う。

どうしてこんな記憶が私の中にあるのかはわからない。だが確實なのは、記憶の中の女と私は人違いをされているのだ。

男たちは私の左手首をじろじろと見てから顔を見合せた。

すると今度は映像ではない。ただ視界は歪み、雑な音声が流れる。

そうだよな。だってあいつは死んだんだ
いるはずがない。名前だって違うんだから

男だから分からぬまるで機会の合成音のようなものが矢継ぎ
早にそう流れ、さらに音が重なり私には解読不能の嵐になつた。
そのノイズのような音に私は激しい頭痛を感じてうつむいて眉をし
かめる。いつたい何なのだ。

バカなやつら…

ふと、はつきりと知らない女の声が響くき、嵐はやんだ。
私は息をつきながら顔をあげる。

「あの…」

店員たちは話し合つていたので私の異変には気づかなかつたらしく、
男はふりむいて私に愛想笑いをする。

「ああ、すまないね。人違いだ。もう帰つていよいよ
「つて人は…どうして死んだんの？」

「なー? 何故その名前を?」

「知らないわよ。こんな能力があつたなんて自分でもびっくりよ

本当に、顔が似ているというだけであつたく知らない女の人生を見
せられるなんてとんだとばつちりだ。死んでいるのかも知らないが、
私の休日がめちゃくちゃだ。なんて迷惑な話だ。

びしゃり

部屋中に何かが降ってきた。鼻をつく独特の臭い。私は一拍遅れてガソリンをかけられたと気付く。部屋は全てガソリンにまみれていた。

「え…？」

誰がつぶやいたのか、それとも部屋にいた全員か、私たちはボリタンクを振り上げた体勢でにやにやと笑うさまざま普通だった店員の一人を注視した。

店員の女は、にやにやと凶悪な、つい先ほどみたようなやらしい笑みを浮かべたまま空のボリタンクを投げた。その女の左手には、一筋の傷痕があった。

再び頭に映像が流れ、よぎった映像に、私は全てを理解した。

この女には、死んだ女の靈がついている。

憑かれた女は、火を放った。

私はパニックになりながらもあらんかぎりに声をあげ、逃げだした。回りは既に火の海だったが、死にたくない。

ぎやあ！

悲鳴に一瞬だけ振り返ると、憑かれた女は燃えながら他の店員に抱きつき、形も分からない顔に唇だけが弧を描いていた。

ただただ恐ろしく、多少の火なんて問題にはならなかつた。

気がつくと私は病室にいた。どうも脱出してすぐに気を失い、救急車で運ばれたらしい。

医者に安静を言い渡されるとすぐに病室に警察官がやってきた。

「では、その店員が急にガソリンを巻いて火をつけた、と？」

「はい」

「にわかには信じられませんね。だいたいあなたはアナウンスで呼び出されたんでしょう？ 知り合いでは？」

「違います」

幽霊のことは言っていない。言ったところでバカにされ、最悪精神科行きだ。だが確かに無理がある。私が逆の立場でも変な話だと思う。けど事実として火をつけた犯人も明白だし、問題はないだろう。

「まあ良いでしょう。あなたは私に何もしてないから、許します」

「…え？」

言われた意味がわからない。私が顔をあげると、警官はこよなくと馴れ馴れしい笑みで私を見ながら、左手で帽子をかぶった。

「私と同じ顔で悠々と暮らしているのは気に入りませんが、あなたのおかげで仕返しもできたので一応礼は言つておきます」

な…こいつは…

「では、失礼します。くれぐれも私に関わらないでくださいね。殺

しますよ。」

にやりと笑つた警官の左手首には、一筋の傷痕が走つていた。

(後書き)

直したつもりですが、最後が微妙ですかね。

ちなみにアナウンスで主人公の名前を呼ばれたのは、クレジットカードからバレたからです。

今更ですが主人公視点だけなので何があつて恨んでるのかがわからないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8569c/>

私は誰？

2010年10月19日14時20分発行